







大窓の裏、中庭の本質は自然の山並みの景色が映り込む。内部  
からは巨木への歩みまでの景色をパノラマに見る。1階の壁は  
山並みの山並みの壁。

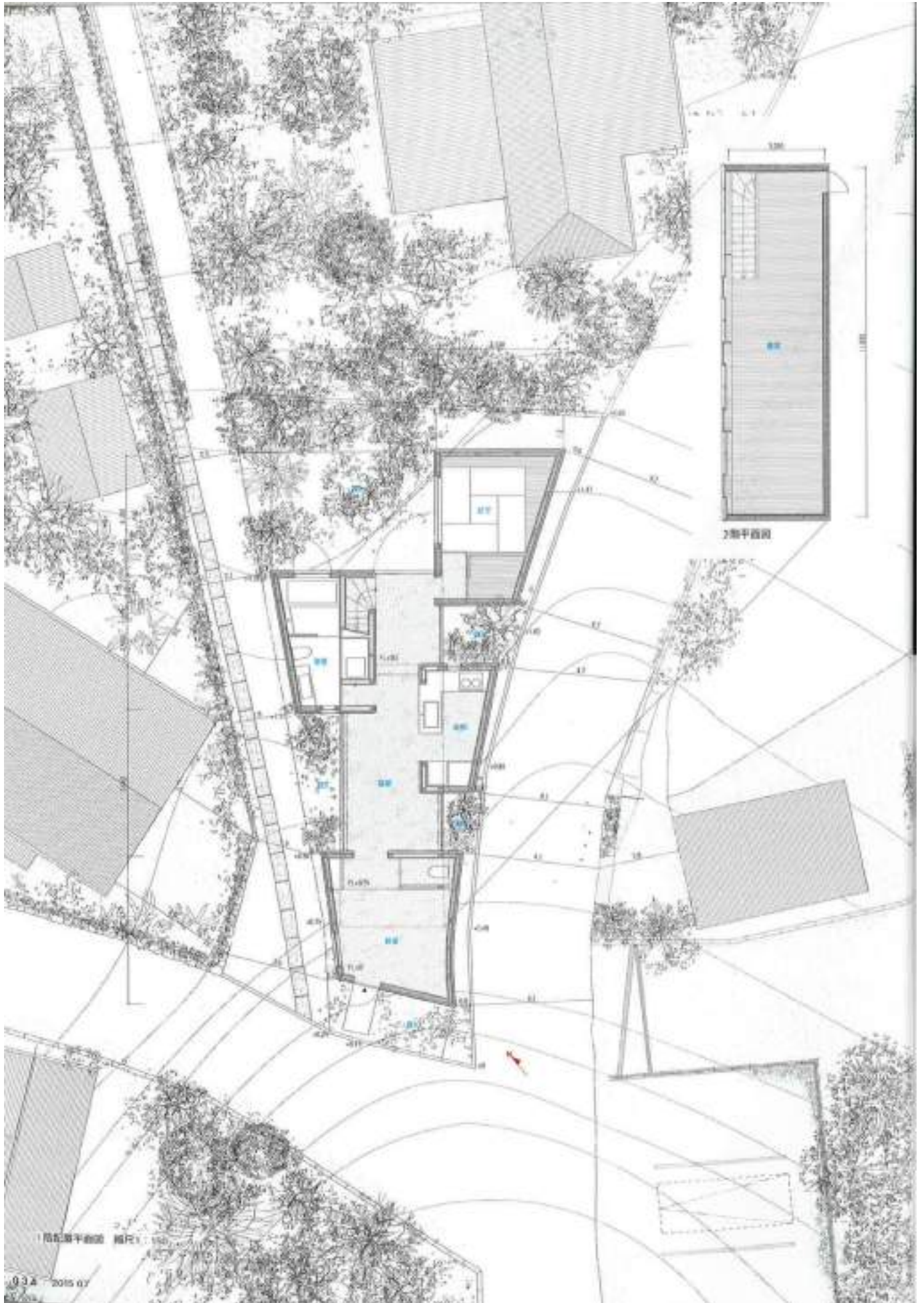








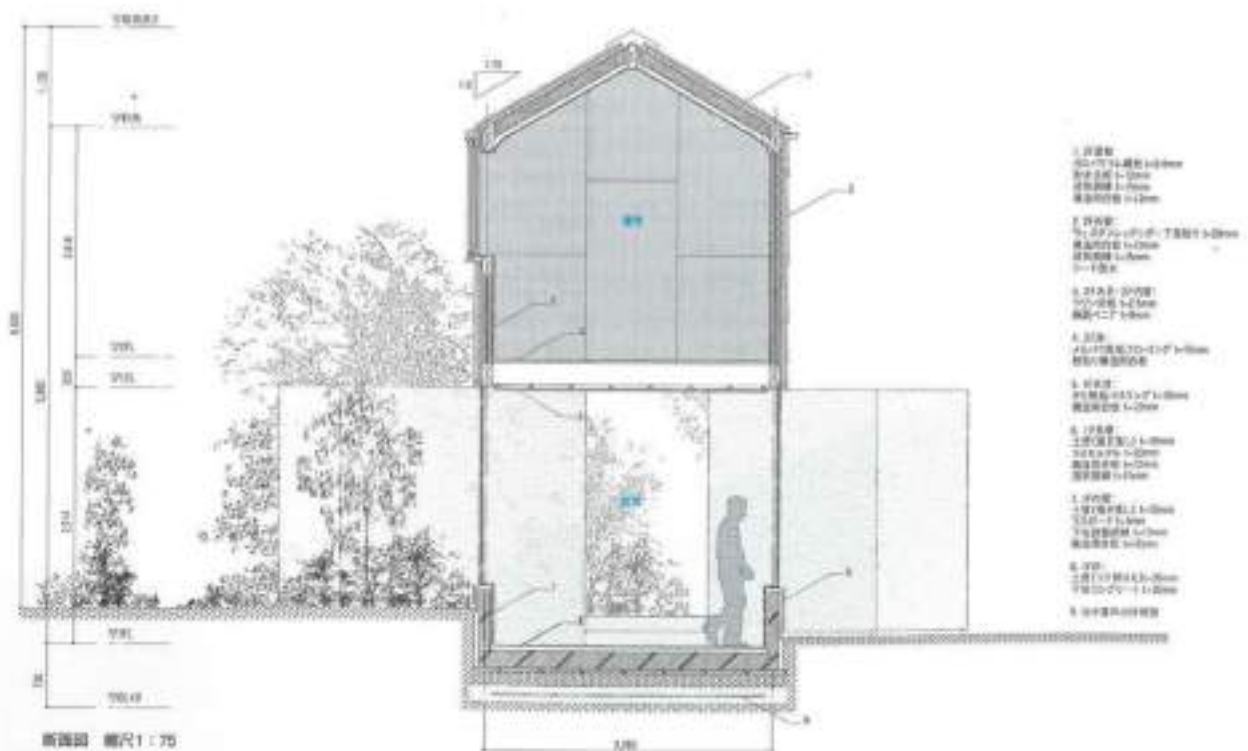
図案。正置のため水回りと右側のキッチンほか4つの機軸が納められた階の壁が滑潤となる。張り合う箇  
の壁には開口部を深掘し外部には庇を設けている。壁は外壁同時に土壁層区画とした上げ、床は敷地の  
傾斜に合わせて斜平かたしレベル差をつけ、滑潤から右平裏の庇室に向かって350mm上げている。





玄関から居室方向を見渡す。外部よりも取り込まれた玄関の床下には地中蓄熱式床暖房を設置。

## 土地の歴史を引き継ぎ現代の居住形式を考える





2階は2.9mm厚のフロン合板を千鳥垂りで覆った一室空間で視界を可る「窓間」。天井高は2.316~2.716mm。

**A HOUSE for DISO**

所在地/神奈川県中部大磯町  
主要用途/別荘住宅  
実住構成/夫婦+子供3人

**設計**

DGT 担当/折原聡  
平塚市営 川田高知雄(元市長)  
構造 yoshikazuhiko STRUCTURE  
設備/全田幸祐  
照明/電機 KOG plus 担当/高橋裕  
外機/空調 澤花屋 昌丸  
担当/志地光太郎  
大橋貴広 担当/大橋幸治

**施工**

完成建設 田島/中原一芳  
土壁外装・内装 今城左吉 担当/今城哲幸  
**構造・構造**  
主体構造・構造 木造  
一部鉄筋コンクリート造  
**基礎** ベルト基礎  
**棟樑**  
建物 地上2階  
軒高 5,700mm 天井の高さ 5,700mm  
敷地面積 169.75㎡  
建築面積 80.90㎡  
(建築率47.96% 許容50.00%)  
延床面積 119.73㎡  
(容積率70.96% 許容100.00%)  
1階 80.80㎡ 2階 119.73㎡

**工期**

設計期間 2014年1月~2014年6月  
工事期間 2014年8月~2015年4月

**敷地条件**

地域地区 第一種住居地域  
道路幅員 北 東4.0m  
外壁仕上げ  
屋根/ガルバリウム鋼板  
外装/土壁張り薄し  
ウェスタンレッドシダー塗装  
開口部/スチール製サッシ 木製サッシ  
内装仕上げ  
キッチン  
床/土床厚さ仕上げ  
壁/土壁張り薄し仕上げ  
天井/PB t=12.5mm SP  
厨房機器/  
オープン・ガスコンロ/ AEG  
衣装箱(シェード)/日立  
家具/製作品  
照明/大光電機  
シンク水栓金物/ Horn  
浴室  
床・壁/珪藻土タイル 15mm  
天井/ケイ酸カルシウム板 t=6mm VP

**家具/製作品**

バスタブ/ CERA  
シャワー水栓金物/ GROHE  
**ダイニング**  
床/土床厚さ仕上げ  
壁/土壁張り薄し仕上げ  
天井/ケイ酸カルシウム板  
照明/大光電機  
建築金物/カワジュン  
扉  
扉/無垢フローリング  
壁・天井/ラワン突板合板塗装  
照明/大光電機  
建築金物/カワジュン  
**設備システム**  
空調 暖房方式/地中熱熱交換機  
冷暖方式/ルームエアコン  
換気方式/第三種換気方式  
給排水 給水方式/上水道直結  
排水方式/下水道直結  
給湯 給湯方式/電気給湯機エコキュート  
撮影/新建築社写真部



別荘敷地図 縮尺1:200

## 場所の尊厳

田根剛 (建築家)

### 土地に帰属すること

地主は大抵の住人になると決めた。都心から1時間ほど離れた大磯は、海と山の間に人口3.2万人の街並みが広がる。

「100年後まで残る家にしてほしい」、これが最初に入られた地主の要望だった。現在、日本の住宅平均寿命は約27年とされている。100年とはその3倍の時間であり、3世代分の家ということだ。すなわちそれは100年後の未来へ向けた家というよりも、これまでも大磯にあり、これからも大磯にあるような家をつくってほしい、そう理解した。大磯には5000年以上も前から住人がいた痕跡が残っている。広大な日本列島の中で、温帯で地盤の安定した環境を選んできた縄文人が住みつけた土地なのだ。それ以来、弥生・古墳時代から江戸時代を経て現代まで、この土地にはさまざまな時代の居住の痕跡が残っている。

設計を始めた頃、ひとつの問題にぶつかった。建築費の扱い方である。この制度は敷地内50%であれば「建てる自由」は保障されている。いくら景観を条例化しても、50%の自由と残りの50%の外部を考慮しない限り、隣家や家々との連続性、都市や集落、自然との関わりある風景をチグハグにさせる。これが住宅計画における公共性が欠落する要因だと思った。そこで、大磯の土地が法的に整備される以前の、家々の屋根勾配、壁面、窓面、雨仕舞い、基礎の立ち上がり、庭の位置、塀のつくり方、気候や風雨、海風、山風などのリサーチを行なった。一方、同時期に人口増加によるマンションや宅地開発が増え、土地とは無関係な建売販売の現場を目の当たりにする。

建築にとってそれが建つ「場所」はすべてである。場所は一度決まると動かすことはない。近隣を譲ぶこともできない。建物は敷地だけではなく、土地の過去にも周辺にも属することになる。

そこでこのプロジェクトを「HOUSE in OISO＝大磯に建つ家」ではなく「A HOUSE for OISO＝大磯のために建つ家」と決めた。「for」とは、贈与の概念である。「家」が土地のためにできること、土地に捧げること、土地に帰属すること。地主が「土地の住人」となる意思を引き継ぐ建築にしたいと思った。

### 形式性

このプロジェクトの初期に、民家住居研究のリサーチを行った。民家とは常々土地の中で培われてきた生活の形式化である。竪穴式住居、高床式住居、竪立柱式住居、町家、別荘建築など、さまざまな居住形式が人権で試されてきた痕跡が残っている。そこでひとつの考えが浮かぶ。近代化が始まる以前のこれらすべての居住形式をひとつの建築にすることはできないだろうか。小さな家における大きな挑戦である。上蓋的な大地と連続した竪穴式住居、地面から居住空間を浮遊させた高床式住居。家と家とが連続する町家……これらの日本の居住形式＝「日本の家」をつくりたいと考えた。

### 「ONE」と「MANY」

「ひとつ」と「多数」という概念がある。物事が「ひとつ」でもあり「たくさん」でもあり、分断できない集合の状態。単一と連続、部分と全体、集中と拡散、象徴と文脈。それらは集落でもあり都市としてのあり方である。「A HOUSE for OISO」では、家を「室」の単位で構成した。「室」とは部屋であり、屋であり、空間である。敷地は3方を道に囲まれ、緩やかに勾配する不定形な敷地であり、海風よりも山からの吹き下ろしの風が強い場所だった。そこに前室、浴室、台所、和室の「室」を敷地の全方向へ拡散し、周辺との距離と余白をつくるような配置とした。4つの室と5つの廊が敷地全体に広がる。そして1階の中央に位置するのが「回廊」となった。多数の室と室の間にある空間の中心であり、内でもあり外でもあるような中間であり続ける場所、生活や家族の移ろいを保てる場所を「居間」とした。一方、2階は「寝間」である。日本古来、寝間は高床の住居に、民家では家の奥に、江戸の町屋には上階に「寝間」はあった。寝間は眠るための「室」であり、ひとが寝る製造的な場所となる。日常を終え精神的な安らぎを求める場所、家族が安らかに安心安眠できる場所。ひとが眠るといふ行為を司る場所。「眠る場所」が守られ、上階に持ち上げられた「一室の寝間」は地上から切り離された「家」として象徴化される。日常の終わりに退る場所、「寝間」が根源的な意味での「家」として生まれた。

### 大地の革命 (Ground Revolution)

「大地の革命」について考えている。近代化を終えた都市の風景は見渡す限り灰色となった。都市は緑化により自然の回復を企ててはいるが、それだけで環境の回復は可能であろうか。プロジェクトの初期に世界の民家研究のリサーチを行なった。すると世界のあらゆる文明文化の民家のほとんどは「茶色」だったことを知る。木、石、土、煉瓦でつくられた建物は多かれ少なかれ茶系色であり、物質の酸化、ほこりの付着、風化と共に茶色は土地の環境として大地へと還元されていく。

「A HOUSE for OISO」では地上階の床と壁を「土」にした。建物を地盤面よりも60cmほど掘り込み、残土をそのまま利用した。土は吸水性の高い素材であると共に断熱性能が高い。さらに建物が土中に埋まることで、夏場は低温を、冬場は床下の蓄熱式放射床暖房を用いて床面を温めるようにした。地面を切り取ったような瓦さと柔らかなある質感、あたかも大地が隆起したかのような、穴蔵が連続する量感が「土」の延長として建ち上がっている。2階は床、壁、天井を包み込むような「木」の一体空間である。風雨を凌ぎ、湿気を逃がす通風と空気の流動を計画した。これらの試みは、自然素材にこだわらなかつたからではなく、「空間の呼吸法」について考えていたのである。鉄、ガラス、コンクリートは、西歐に端を発する近代建築が生み出した発明的な素材である。しかし、日本の温暖湿潤気候は、湿度が日本の居住空間を「夏は熱く、冬は寒く」する。そこで、構造よりも環境を、骨格よりも質感を、20世紀よりも21世紀を見据えた建築にしたいと思った。

この先の建築が近代の「白」を乗り越えようとするなら、その建築はより透明度を増し、光の建築となっていこう。あるいは、建築がこれから大地に居座り残ると決意するのなら、建築はより深みを求めていくこととなる。もし「家」という存在が、地主と建築家の私的な関わりを越えて、ひとつの公共性を明示することができるとしたら、それは「場所の尊厳」を未来へと繋ぐことではないだろうか。